

# 第42回 花巻市民劇場公演

## 多田等観物語

# 『日が昇る 観音山に帰りたい』

郷土の文化や歴史をテーマに、脚本、キャスト、スタッフなど全て市民の手によって作り上げる市民劇場。今回は、チベット学の権威として活躍した「多田等観」の物語だ。チベットで何を感じ、何を学んだか。疎開した花巻・円万寺での暮らしは。等観の生涯をテーマに仏教研究の礎をつくった誠実な歩み、花巻の人々との交流を描く。

### 本年度の市民劇場始動

11月20日、文化会館で本年度の花巻市民劇場の旗揚げが開かれた。集まったのは7歳から60代までの30人。週1〜2日、2月に入ってから週5日の練習を重ね、公演の成功を目指す。

本番はキャスト30人、照明や小道具など50人のスタッフで運営。学業や仕事の傍らで練習・作業をするため、なかなか全員が集まることはできない。その中で毎年観

客の心を動かす舞台をつくっていか

今回の主役は素足でヒマラヤを越え、チベットの経典などを花巻に伝えた人物・多田等観(1890〜1967年、秋田市出身)。▼20代の若き僧がなぜチベットに行くことになったのか▼なぜ花巻にチベットの経典などがあるのか▼円万寺の人とのふれあい▼彫刻家で詩人の高村光太郎との出会いなどを、ユーモアを交えながら描く。本作『多田等観物語 日が昇る 観

音山に帰りたい』は平成16年に同市民劇場で公演されたもの。故・鹿川比呂志さんが3年にわたり取材し書き上げた大作だ。昨年、等観が没後50年だったこともあり今回リメイクが決定した。

前作で脚色・演出を務めた高橋信也さんが本作でも指揮を執る。高橋さんは「前回、演出しきれないところがあり悔いが残った。その部分を修正し、完成度を高めたい。

郷土愛や人への愛を盛り込めていければ」と話す。

### 本作の等観像

「助けてける。誰が、やんたやんた、もうやんた畜生」

物語はチベットを目指す等観が、吹雪に泣き言を漏らす場面で幕を開ける。

脚本を手掛けた故・鹿川さんは等観の人柄や性格を描写するのに苦労したという。そこで苦肉の策として姓名判断で等観を鑑定。「普通の人の5倍忍耐力がある。いろいろな人から助けられ成功する」という判断をヒントに筆を走らせた。チベット行きを嫌がっていた等観が、周りに助けられながらも、持ち前の忍耐力で運命を切り開いていく姿を書き上げた。

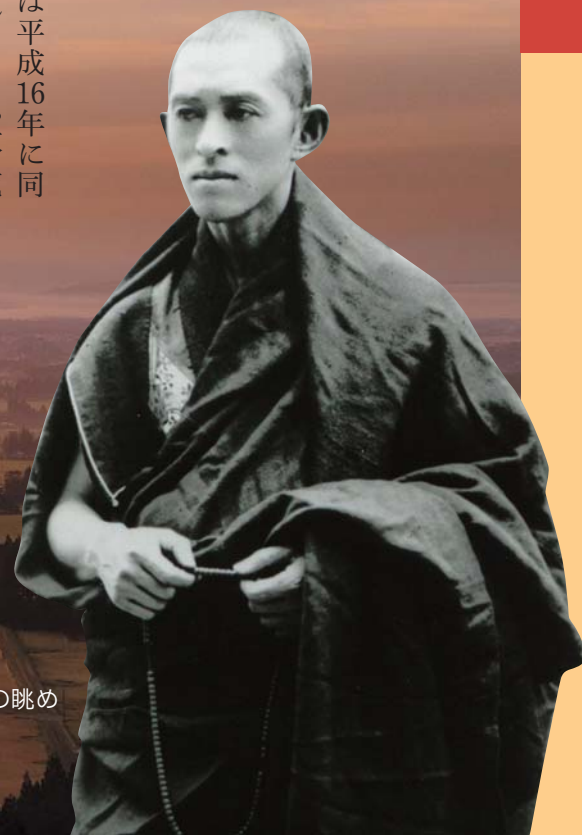
場面の間に、花巻市博物館に寄贈された等観由来の経典や仏画を映像を交えながら説明。予備知識がなくてもストーリーを楽しめるよう工夫されている。「花巻の郷土愛を深めてもらいたい。若い人が改めて花巻のことを好きになれる作品に仕上げたい」と脚色・演出の高橋さん。花巻の魅力を訪ねて、文化会館に足を運んでみてはいかがだろう。

【問い合わせ】文化会館(☎24-6511)



【上】旗揚げに参加した皆さん【左下】脚色・演出の高橋信也さん。第8回の公演からキャストや演出などで同市民劇場に携わる【右下】舞台の動きに合わせて台本の読み合わせをするキャストたち

多田等観の生涯	
明治23(1890)年 7月1日	秋田県土崎港旭町(現秋田市)の浄土真宗本願寺派・弘誓山西船寺の14世多田義観の三男として生まれる
同44(1911)年	県立秋田中学校卒業後、20歳の時に本山の京都・西本願寺に入山修行に入る
同45(1912)年 1月	西本願寺22代門主・大谷光瑞の命により、チベット高僧の留学生と共にインドへ。そこでダライ・ラマ13世に拝謁しトウブテン・ゲルツェンの法号を賜る
大正2(1913)年 7月	ダライ・ラマの要請によりチベットの聖地・ラサヘ。高山病に苦しみながらもほぼ裸足でヒマラヤ山脈を踏破し1カ月で入国する
同11(1922)年	等観31歳の時、外国人で例のなかった、ラマ教の最高学位・ゲシェー(大僧正)に任命
同12(1923)年 3月	門外不出のチベット大蔵経や薬草、医学に関する秘蔵書などと共に帰国
同14(1925)年	東京帝国大学(現 東京大学)の嘱託を経て、東北帝国大学法学部(現 東北大学)に着任
昭和9(1934)年	チベット仏教の経典を集めた『西藏大蔵経総目録』を刊行。世界の仏教学界に偉大な貢献を果たす
同20(1945)年	等観54歳の時、チベット請来の経巻や典籍を戦禍から守るため光徳寺(南川原町)に疎開
同22(1947)年 8月	円万寺観音堂(藤立)境内に村民から一燈庵の寄贈を受ける。翌年8月、一燈庵脇に経堂を建立。チベット請来の経巻や典籍を収蔵する。このころ高村光太郎と親交を深める
同26(1951)年 6月	等観60歳の時、アメリカのアジア文化研究所とカリフォルニア大学の招きにより渡米。同28年11月に帰国
同28(1953)年	大蔵経以外の文献の目録『西藏撰述仏典目録』を刊行。この業績により同30(1955)年に日本学士院賞を受賞
同31(1956)年	財団法人東洋文庫に迎えられ、チベット学研究センターに主任研究員となり、その後は亡くなるまで後進の育成に尽力した



帰国後の等観と円万寺からの眺め

日時

2月24日(土)、午後6時30分  
2月25日(日)、午後2時

会場

花巻市文化会館

入場料

大人1000円、高校生500円、中学生以下無料(前売り・当日同額)

フレイガイド 文化会館、なはんフラザ、正時

堂、イトウセイ、いかせん商店、砂田屋石鳥谷店、道の駅とうわ